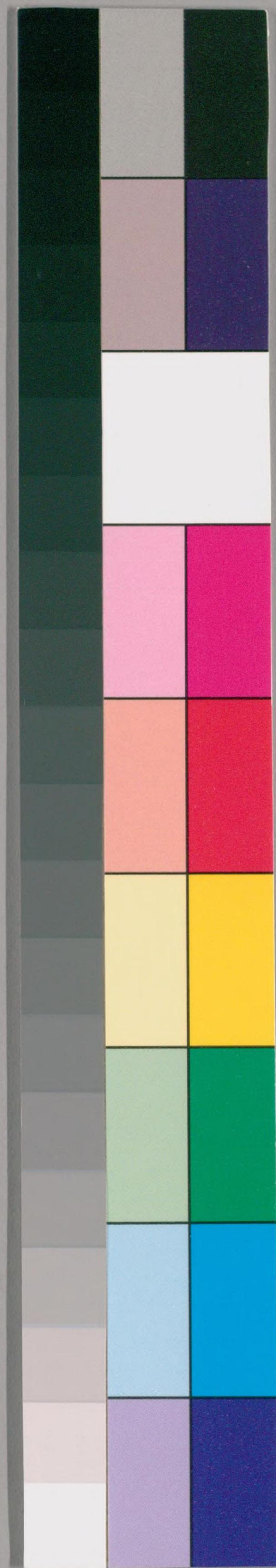


縣門遺稿

838
5
19



国立国会図書館 タイトル『県門遺稿 5巻』 請求記号 838-19

ガラス使用



縣門遺稿彙編

輯取急彦家集

曹山文庫

根岸信輔氏寄贈



文政享和

海防

ていへば、
 一、海防の要は、
 二、海軍の整備、
 三、砲臺の修築、
 四、水雷の研習、
 五、船政の振興、
 六、海防の教育、
 七、海防の行政、
 八、海防の財政、
 九、海防の法律、
 十、海防の外交、
 十一、海防の内政、
 十二、海防の国防、
 十三、海防の民生、
 十四、海防の文化、
 十五、海防の科学、
 十六、海防の技術、
 十七、海防の産業、
 十八、海防の交通、
 十九、海防の通信、
 二十、海防の情報、
 二十一、海防の治安、
 二十二、海防の秩序、
 二十三、海防の公正、
 二十四、海防の誠實、
 二十五、海防の勇敢、
 二十六、海防の忍耐、
 二十七、海防の謙遜、
 二十八、海防の恭敬、
 二十九、海防の節儉、
 三十、海防の儉樸、
 三十一、海防の克己、
 三十二、海防の忍耐、
 三十三、海防の謙遜、
 三十四、海防の恭敬、
 三十五、海防の節儉、
 三十六、海防の儉樸、
 三十七、海防の克己、
 三十八、海防の忍耐、
 三十九、海防の謙遜、
 四十、海防の恭敬、
 四十一、海防の節儉、
 四十二、海防の儉樸、
 四十三、海防の克己、
 四十四、海防の忍耐、
 四十五、海防の謙遜、
 四十六、海防の恭敬、
 四十七、海防の節儉、
 四十八、海防の儉樸、
 四十九、海防の克己、
 五十、海防の忍耐、
 五十一、海防の謙遜、
 五十二、海防の恭敬、
 五十三、海防の節儉、
 五十四、海防の儉樸、
 五十五、海防の克己、
 五十六、海防の忍耐、
 五十七、海防の謙遜、
 五十八、海防の恭敬、
 五十九、海防の節儉、
 六十、海防の儉樸、
 六十一、海防の克己、
 六十二、海防の忍耐、
 六十三、海防の謙遜、
 六十四、海防の恭敬、
 六十五、海防の節儉、
 六十六、海防の儉樸、
 六十七、海防の克己、
 六十八、海防の忍耐、
 六十九、海防の謙遜、
 七十、海防の恭敬、
 七十一、海防の節儉、
 七十二、海防の儉樸、
 七十三、海防の克己、
 七十四、海防の忍耐、
 七十五、海防の謙遜、
 七十六、海防の恭敬、
 七十七、海防の節儉、
 七十八、海防の儉樸、
 七十九、海防の克己、
 八十、海防の忍耐、
 八十一、海防の謙遜、
 八十二、海防の恭敬、
 八十三、海防の節儉、
 八十四、海防の儉樸、
 八十五、海防の克己、
 八十六、海防の忍耐、
 八十七、海防の謙遜、
 八十八、海防の恭敬、
 八十九、海防の節儉、
 九十、海防の儉樸、
 九十一、海防の克己、
 九十二、海防の忍耐、
 九十三、海防の謙遜、
 九十四、海防の恭敬、
 九十五、海防の節儉、
 九十六、海防の儉樸、
 九十七、海防の克己、
 九十八、海防の忍耐、
 九十九、海防の謙遜、
 一百、海防の恭敬、

件能急を、
 一、海防の要は、
 二、海軍の整備、
 三、砲臺の修築、
 四、水雷の研習、
 五、船政の振興、
 六、海防の教育、
 七、海防の行政、
 八、海防の財政、
 九、海防の法律、
 十、海防の外交、
 十一、海防の内政、
 十二、海防の国防、
 十三、海防の民生、
 十四、海防の文化、
 十五、海防の科学、
 十六、海防の技術、
 十七、海防の産業、
 十八、海防の交通、
 十九、海防の通信、
 二十、海防の情報、
 二十一、海防の治安、
 二十二、海防の秩序、
 二十三、海防の公正、
 二十四、海防の誠實、
 二十五、海防の勇敢、
 二十六、海防の忍耐、
 二十七、海防の謙遜、
 二十八、海防の恭敬、
 二十九、海防の節儉、
 三十、海防の儉樸、
 三十一、海防の克己、
 三十二、海防の忍耐、
 三十三、海防の謙遜、
 三十四、海防の恭敬、
 三十五、海防の節儉、
 三十六、海防の儉樸、
 三十七、海防の克己、
 三十八、海防の忍耐、
 三十九、海防の謙遜、
 四十、海防の恭敬、
 四十一、海防の節儉、
 四十二、海防の儉樸、
 四十三、海防の克己、
 四十四、海防の忍耐、
 四十五、海防の謙遜、
 四十六、海防の恭敬、
 四十七、海防の節儉、
 四十八、海防の儉樸、
 四十九、海防の克己、
 五十、海防の忍耐、
 五十一、海防の謙遜、
 五十二、海防の恭敬、
 五十三、海防の節儉、
 五十四、海防の儉樸、
 五十五、海防の克己、
 五十六、海防の忍耐、
 五十七、海防の謙遜、
 五十八、海防の恭敬、
 五十九、海防の節儉、
 六十、海防の儉樸、
 六十一、海防の克己、
 六十二、海防の忍耐、
 六十三、海防の謙遜、
 六十四、海防の恭敬、
 六十五、海防の節儉、
 六十六、海防の儉樸、
 六十七、海防の克己、
 六十八、海防の忍耐、
 六十九、海防の謙遜、
 七十、海防の恭敬、
 七十一、海防の節儉、
 七十二、海防の儉樸、
 七十三、海防の克己、
 七十四、海防の忍耐、
 七十五、海防の謙遜、
 七十六、海防の恭敬、
 七十七、海防の節儉、
 七十八、海防の儉樸、
 七十九、海防の克己、
 八十、海防の忍耐、
 八十一、海防の謙遜、
 八十二、海防の恭敬、
 八十三、海防の節儉、
 八十四、海防の儉樸、
 八十五、海防の克己、
 八十六、海防の忍耐、
 八十七、海防の謙遜、
 八十八、海防の恭敬、
 八十九、海防の節儉、
 九十、海防の儉樸、
 九十一、海防の克己、
 九十二、海防の忍耐、
 九十三、海防の謙遜、
 九十四、海防の恭敬、
 九十五、海防の節儉、
 九十六、海防の儉樸、
 九十七、海防の克己、
 九十八、海防の忍耐、
 九十九、海防の謙遜、
 一百、海防の恭敬、

事

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, covering lines 24 to 34.

Handwritten text in cursive script, including a small boxed character '一' and a vertical column of text, covering lines 36 to 46.

Handwritten text in cursive script, covering lines 47 to 48.



みほのち、ちのちのち

千般石破人乎和志不服惡氣伎輩乎掃清治給豆
可幾加增布百歲餘外國毛弓弦不鳴鉞不執浦
安國等安良計久鎮賜志神之坐二荒乃山波御
繼々不動祥登巖之根之凝敷山萬代爾不絶瑞
登落瀧津佐也計伎山山杉乃過去時從樛之樹
乃彌繼々尔政申給倍利御裔之御孫之命御祖
之神津三諸尔今年志毛黍給倍婆御供之麻倍
都伎美多知諸之官人等吹風尔往雲如御跡先
尔隨奉國中之大御寶波夏草之麻氣留奈志豆

三

畏仕奉都山川乎倍奈禮流國毛御坐尔伊麻世
流如御園乎往麻須如神宮尔到給奴御靈毛天
翔未志見志給比宇禮志美麻佐武今之此時

反哥

靈治波布神之御稜威尔真鳥住荒伎其山毛御
園等成努

此神乃鎮母利末世婆巖疊恐伎山毛御坐等奈
理幾

同河津廣法修下仕在法修廣下在幣

袋歌ニッ

中よは花の葉あはれのも月たふのこり
六月の月あはれは花の葉あはれ

みあ月のこりあはれは花の葉あはれ
あはれ

はのこりあはれは花の葉あはれ
七月七夕雨

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
秋那

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
中津の法嗣天新及は梅屋よ時鯉の画を

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ

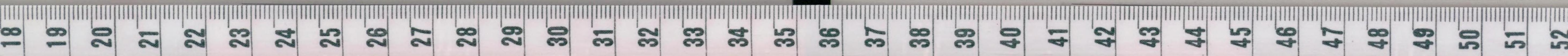
あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
新築乃法築の法築よは花の葉あはれ
沫画たや。潜坊一。鑄の度物是。

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
菟枝のあはれは花の葉あはれ

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
海つるゆのあはれは花の葉あはれ

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
浮勢の國よは花の葉あはれは花の葉あはれ

あはれは花の葉あはれは花の葉あはれ
工等、の植築ま今作。新築の機好の葉たよて



中津のふた新夏かて

海濱の満ちあふの夜をよこしりて
同詠有

夕暮れにたもつほろけの月夜を
同詠麻

あつたつきの麻の音はよこしりて
同詠夏

ふたつと夏海をよこしりて
入る月のよこしりて
あつたつきの麻の音はよこしりて

六

たつたつきの麻の音はよこしりて

後舟

たつたつきの麻の音はよこしりて
この月十四日海田はよこしりて

秋の夜をよこしりて
同原

浅き生れつきの夜をよこしりて
同原

海神を擁以の夜をよこしりて

中津のあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふか

さういふあはれをいかにいふか
九月廿七日東河一坂の古母火の古母火は
琴の笛の響もたるといふとさういふあはれをいかにいふか
さういふあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか
あはれをいかにいふかのあはれをいかにいふか

かゝる人なれば

酒の味も

他國の

十一日廿六日大垣の

父を國の

おたふ

お歌

お歌

お歌

お歌

十三

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

お歌

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written on aged paper and is somewhat faded. It appears to be a personal communication, possibly related to the 'Kaminari' mentioned in the page number.

十六

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes several lines of text, some of which are more legible than others. The text seems to be a continuation of a letter or a diary entry, possibly mentioning a date or a specific event.



あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

梅のふりつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

浦を

風の音もあつちりつらふりてあつちり

色江の膳もあつちりつらふりてあつちり

あつちり

涼もあつちりつらふりてあつちり

同法存の梅

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

十七

中津のちりつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

旅日

六月の中よりあつちりつらふりてあつちり

清もあつちりつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

梅もあつちりつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

あつちりも光もれり雲もたふしつらふりてあつちり

しつとせしむるなり

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

月一ヶ月

大なる其の海に出入りて月を照らす也一ヶ月

月を照らす也

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

月一ヶ月

大なる其の海に出入りて月を照らす也一ヶ月

月を照らす也

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

月一ヶ月

二廿

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

大なる其の海に出入りて月を照らす也一ヶ月

月を照らす也

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

大なる其の海に出入りて月を照らす也一ヶ月

月を照らす也

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

大なる其の海に出入りて月を照らす也一ヶ月

月を照らす也

其の如くして昔の如くはなれども今も昔も変わらぬ

月法の神女は教を授かるよ白ゆふなりて

白一はたのしむるなりて

中きり

美らなる神女は教を授かるよ白ゆふなりて

九月十三日

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

中きり

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

目次

人々を導く神女は教を授かるよ白ゆふなりて

中きり

山崎のよき人なる山の柏原とよ神女は教を授かるよ白ゆふなりて

九月十三日

中きり

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

中きり

神女は教を授かるよ白ゆふなりて

水鏡の巻の末のしるしに

松

流みつるよ取れぬさる百はは松いりまは神の流さつらとそ

杖

をららば方のまのしるしも杖たつしるしあつた

又ニ鉄撥作馬樂調

丹生山

少ふしるしあつたしるしあつたしるしあつたしるしあつた

のりま同林

水鏡の巻の末のしるしに

廿九

一

珠海海々

まは海海まは海まは海まは海まは海まは海まは海まは海

國人や橋をくまぬやあまはそこすやまは後の橋

伴勢園山田なる言治中板め一能煩野そは

むはたつとも古代のむ子強うれはむはたつとも

一

神風の伴勢園百船度相を足ぬ本乃山田の原尔吾

友乃ははむむるむる安らるるハハハハハハハハハハハハハハハハ

見久よの伎可増希十年去るぬ志久母向須流

是^ハノ能^ホ煩^ヌ解^ス小^{アリ}在^キ伎^ト也^フ布^タ玉^マの石^イ上^ツ古^カ代^ノ通^シ玉^タ結^ム。
丹^ニ乃^ホ穂^ホ也^ハ其^マ玉^タ強^ク比^ヒ於^ツ白^シ玉^タ之^ノ古^コ百^ヒ津^ツ於^ド杯^ビ比^ヒ乃^ノ。
何^イ時^ツ毛^モ々^々。此^ミ統^ス乃^ニ玉^タ乃^ノ。是^シ未^マ久^ク保^ホ利^リ。吾^ワ復^フ詠^{エイ}君^{キミ}乎^ヤ。
見^ミ奈^ナ須^ス玉^タ滄^{サウ}指^シ互^ニ於^ツ夕^{セキ}尔^ニ是^シ矣^ヤ。志^シ乃^ノ海^{ウミ}乃^ノ於^ツ乃^ノ。
な^ヒた^マ者^テ二^ニ

反歌

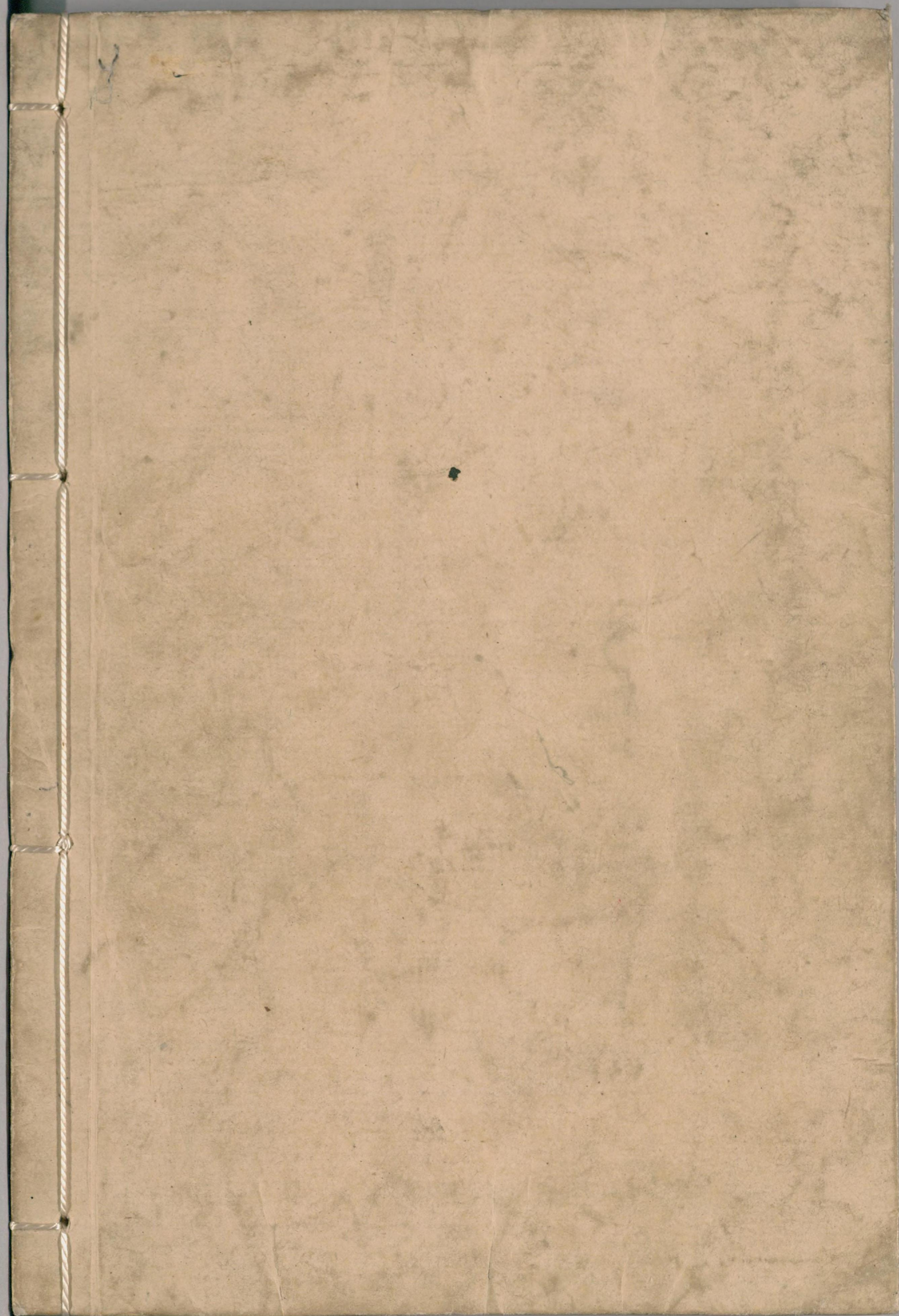
狭^サ丹^ニ頼^ラ布^フ尔^ニ乃^ノ保^ホ奈^ナ須^ス玉^タ伴^イ勢^セ乃^ノ海^{ウミ}乃^ノ那^ナ尔^ニ波^ハ乃^ノ。
思^{オモ}尔^ニ乃^ノ保^ホ奈^ナ須^ス玉^タ

三十

白穂乃のから

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]





国立国会図書館 タイトル『県門遺稿 5巻』 請求記号 838-19

ガラス使用